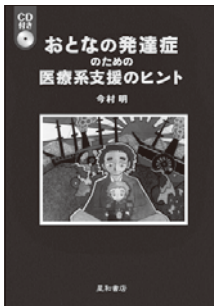


■ 書 評



おとなの発達症のための 医療系支援のヒント

今村 明 著
星和書店
2014年11月 240頁
本体価格 2,800円+税

「本書はいわゆるマニュアル本ではない。著者が自分自身のために作成した『覚書き』である」と帯に記されているが、一冊で発達症 (DSM-5 では neurodevelopmental disorder が「神経発達症群」と訳されているため、本書では発達障害ではなく、発達症と表記されている) の概念の変遷と診断、薬物療法、非薬物療法による介入について、診療でも実践可能な形で解説されている優れた教科書である。

「発達症」は、メディアも注目する疾患概念でもあり、一時わが国でもこの呼称が「流行」し、急激にその名が広まったため、疾患の認識について各所で誤解を生じたこともあった。近年の精神保健医療の現場において、ASD (自閉症スペクトラム症) や ADHD についておおむね正確に理解されるようになったが、日々の診療の中で、診断は根拠を持ってなされているか？ 診断の後、当事者に具体的にどう接するべきか？ 何を助言するか？ …迷いながら診療し、いくつかのアドバイスのレパートリーはあるものの、診療の回が重なると、助言することも尽きてしまいがちではないだろうか？

本書の診断についての章は、各種評価尺度が、すぐに臨床で使えるように解説され、公開可能なものは、付表として掲載されている (一部は付属 CD-ROM に Word・Excel 形式の資料として使用できるようになっている)。特に目を引くのは、著者らが作成した「社会常識テスト 長崎大学バージョン」で、発達症当事者が陥りがちな問題を、日本の文化背景に即した場面設定で描かれてい

る。実際に臨床で問題となる他疾患との鑑別についても解説されている。

介入についても惜しげなく解説されており、多彩な発達症の症状ごとに分け、対処法が列挙されている。例えば、「不注意」への対処として、手帳でスケジュール管理やスマートフォンのアラート機能を使うなどの指導や、文字情報が優位な当事者へ電子カルテの画面を利用する方略、感覚の独特のこだわりへの対処法として「サングラス」「耳栓」「ツボ押しのためのプラスチックボール」…など具体的に、安価で、すぐに実行に移せるものである。EBM の枠を超えて、普段の暮らし、仕事や学校の事情に合わせて開発された対処法のリストは、見ていると発達症の診療が「楽しみ」となりそうである。

薬物療法についても具体的に解説されている。

著者は発達症の告知の際に、その傾向のあった著名人を紹介することもあり、その際につかわれるスライドも提示されているのが、本書で最も重要な部分と考えられる。

「エネルギーッシュでときに暴走するが、好きなことに関しては集中できる傾向から、大きな成功を収めた人々も歴史上多いと言われている」と坂本龍馬、織田信長などの人物が紹介されている。この告知の部分を中心に、発達症とはどのようなものか、専門用語を使わず、腑に落ちるたとえて当事者に語りかけている著者の姿勢は、ステイグマ、とくに当事者自身が持つ自己へのステイグマを超えてほしいという思いがある。

本書の表紙のイラストでは、少年が坂本龍馬に支えられていて、その後ろに黒船と暁がみえる。自閉症スペクトラム症の当事者の青年が書いた作品で、著者の診察室に飾られて、診察室を訪れる人の注目を集めているとのこと。この作品が表紙を飾るのはどこか変わっていても、人の思いの温かさや希望に支えられ、誰にもない才能で未来を拓いていく、そのように発達症の当事者が人として成長するようという著者の願いが込められているように思える。そして支援を学ぶことで、読者もエンパワーメントされる、不思議な一冊である。

(今村弥生)